桜貝

弥生

和美さんと私は同級生の中で一番近くに住んでいた。家から歩いて十五分位先に和美さんの家はある。登下校の時も「昨日な、家のミケが子猫を生んださ」「えーっ、何匹？」等と話したり、時には「走ろう、よおい、どん」二人で全力を出すがこれは長続きしない。二人共、運動は得意ではなかった。こんなふうで四十分かかる道も遠いと思うことはない。学校帰りは我が家に立ち寄り話したり宿題も少し広げた。そんなある日、和美さんはランドセルを開けると私の手の平に「これあげる」と乗せた。それは直径一センチ位の扇形の貝殻だった。何よりも私をときめかせたのはその色がとても淡いきれいな桜色をしていたことだ。「もらっていいが？」と嬉しくてちょっと大きめな声で繰り返した。和美さんは「うん、うん」と頷いた。「ありがとう。大事にするから」と心からそう思って言った。貝の名は知らなかったが私は桜貝と決めた。その後は間近に迫った修学旅行が話題だった。名所旧跡を回ることには何も触れず今まで手にしたことのない額のお金の使いみちを相談する時間が長いのだ。いつもは五円とか二十円を大喜びでもらっていたのに百の単位のお金を自由に使って良い。夢のようなことでした。その結果「餡パンをいっぱい食べよう」と意見が一致した。和美さんと話しながら母ちゃんがほんのたまに作ってくれる小麦まんじゅうもおいしいけど売ってる餡パンは違うものだなあと思った。買った記憶はなかったがどこかで食べた。フワフワでとびっきり甘かったのを思い出していた。昭和三十年代始めの頃のこと。貧富の差なく甘い物にはなかなか出会えない。

後日、和美さんのお母さんと母は立ち話で「二人は旅行へ行ったら餡パンを買って食べるんだって言ってるよお」「あれ、まあ、そりゃあ楽しみなこんだなあ」と笑っていた。私はそのことを母に伝えてあった。何か記念になるものやお土産を考える人が多いだろうに、ただ食い意地が張っているだけだった。それが母達には残念でもあり面白くもあったのだろう。

旅行も間近になった日、先生は注意事項や行先の予定を伝えた。教室中、ワクワクした気持があふれそう

だった。

当日、出発は早くまだ暗い朝、親は学校まで送ってくれた。五十八名の私達は胸躍らせながらバスに乗り込み親達は手を振って見送ってくれた。これから天城峠を越え一路静岡へ向かう。国道一三六号線が駿豆線と並んで走るまっすぐの道に来た時のこと、三島から修善寺に向かって来る電車が遠くに見えた。その途端バスの中は興奮状態になった。

「電車だ！」「電車が走ってる」「すげえ、かっこいいなあ」「わっ、はえー（はやい）」バスの中は電車が見える側に折り重なる様に全員が寄った。窓側の人はガラスに頬がはりついた。走り去った電車を見送り所定の席に戻った私達は余韻を楽しむように静まり返った。一泊二日の旅はこうして大感激の幕あけでした。

県庁、登呂遺跡、久能山等を回り何もかも興味深くすべてが身体にしみ渡っていくようだ。しかし団体行動の中で和美さんと二人だけで餡パンを食べる機会はなかった。いっぱいの刺激がおしよせ、それを残念と思うこともなく過ごしていたのだ。

旅行が終わってから思った。皆が一番喜んだのは本物の走る電車を初めて見た時だと。でも、それは先生に言わないほうが良いと子供心に考えた。

村中に枇杷の実がたわわに実る頃のこと。学校から帰ればどこかから届いた枇杷がざるに山盛りになっていた。ある日、元気に登校した和美さんの具合が悪くなり医務室からすぐ病院へ運ばれたのでよほど悪いのかと心配した。私が下校する時も戻らない。お母さんが迎えに行ったと聞いたのだが家の前で待つ時間をとても長く感じた。しばらくしてお母さんに背負われて帰って来た。そばまで来た時、和美さんは目をつむったままお母さんの背に頭をあずけぐったりしていた。肩につかまる力もないようで腕はお母さんの胸の前に

伸ばしたままだ。母も心配して出て来ていた。「ただの風邪だと言われたけんどな」と不安げなお母さんだった。「和美さん、和美さん、苦しいが？」と背中に手を当てて声をかけたけど何の反応もなかった。これが私に見せた最後の姿になるなんて思う訳がない。二日後、担任の先生は急ぎ足で教室へ入ると重い口調で言った。「和美さんが今日亡くなられたと連絡がありました」それはとても事実とは信じられない。だって三日前、ふざけたり走ったりして登校したのだから。少しするとやっぱり本当なのだと涙が止まらなくなった。教室中に沈黙が広がる。涙をぬぐいながら顔を上げると、そこは夕暮れ近くの部屋に見えた。外はあんなに明かるいのに。後で知ったのだが和美さんは風邪ではなく赤痢だったという。感染力が強い病気なのでその日のうちに荼毘に付されお葬式はお骨になってからでした。悲しすぎた。もう一緒に学校へ行けないのだと胸が塞がれる思いでした。

和美さんの机には花が飾られいつも通りの授業が続いた。亡くなって四、五日目の頃私は登校できない程ひどい下痢になった。三日過ぎても治らない。母は外の物陰に新聞紙を広げ用を足すよう言った。そこで目にしたのは白く透き通ったような粘液便でした。熱はなかったが母は慌てた様子で「病院へ行こう」と村にたった一軒ある医師の所へ急いだ。高齢でもありのんびりゆったりとした診察の後、「心配な下痢ではない」と伝えた。詳しい説明もなくそう言われたのが母は不満のようだ。家に帰ってからも「大きい病院に行った方が良かったかなあ」と呟いていた。この頃は電話もテレビも周りにはなくてすべての情報が乏しかった。母は和美さんのこともあり感染の不安に怯えていたはずだ。おそらく今までにそんな便は見たこともなかったのだろう。飛び上がる程の驚きだったに違いない。現在はスマホもありほとんどのことが手元でわかる。文章を書いていて思い出し今さらと考えたが「粘液便」と入力した。「透明か白色であれば一過性の腸炎の可能性。又はストレスによる腸の刺激が原因」とあった。体調を崩す前日、親戚でご馳走になった煮豆がとて

もおいしくてたくさん食べた。それがいけなかったのか。和美さんを亡くしたことがストレスになったか。原因はわからないまま病院へ行った甲斐あってか二日後には回復した。

登校した私の顔を見ると担任の先生は「職員室でもクラスでも大変心配していた。治って良かった……。本当に良かった」と涙をこぼしそうな顔に安堵の表情を浮かべた。それ程までに心配をかけたのかと悪いことをしたような気持でした。和美さんの病気は誰にも感染することはなかった。

ある時、教室に皆が集まった。先生はいなかったが学級委員長の貴史さんが声をかけたようだ。「命日に墓参りをしないか」という相談でした。私は「行けば喜ぶと思うよ」と言ったが皆の心はもう決まっているように見えた。だから話し合いはすぐに終わった。

その頃のことでした。夕食後、家族と話している時「和美ちゃんは星になってしまったなあ」と母が言ったから満点の星空を眺めた。とてもきれいだけれどあんなに遠くへ行ってしまったなんて考えたくない。突然のできごとに何事も上の空で心は沈みがちだ……。星を見ながら、ふと思い出した。「そうだ、桜貝がある」すっかり忘れていた。お互いに何かをあげることはほとんどなかった。

和美さんから私への初めてのプレゼントでした。これなら、いつだって見ることも触れることもできる。ほんの少しだけ気持に明かりが灯った気がした。大切な物入れ用の小箱にしまってあるのです。

何があろうと月日は流れ卒業式、入学式と続く。中学生になりセーラー服に小豆色のスカーフを結ぶのも嬉しい。喜びと寂しさが入り乱れる。だがいつまでも立ち止まっていてはいけないと中学生活の楽しさに気を紛らそうとする私でした。

中学の教室に少し馴染んできた頃、命日は巡ってきた。一年の時が過ぎるのは意外に早いなあと思った。

私達は授業が終わるとお墓に向かう。それぞれの都合もあり全員参加ではないけれど三十人位はいた。学区は現在の下田市の終わりから弓ヶ浜方面まで細長く続いており、その中央あたりに学校はある。私は帰る方向だから良いのだが弓ヶ浜方面の皆は大変なことだ。随分長い距離を往復しなければならない。でも皆は疲れを知らない様に元気だ。最後は急斜面に作られた段々畑の様な墓まで登る。細い道の両側に伸びた茂みにつかまったり、すべったりしながらだ。男子はやはり速い。でも参加者全員が揃うまで座り込んで待ってくれた。お線香は持たなかったが花は誰かが庭に咲いたのを持ってきてくれたこともある。クラスでも飛び抜けて背の高い貴史さんは全員の顔を確認すると立ち上がる。すると「起立」のかけ声がなくても皆それに倣います。「今日は墓参りができて良かったです。元気な歌声を和美さんに聞いてもらおう」と言い貴史さんは両腕を上げ指揮の形をとる。それに合わせて皆で歌い出す。まるで先生みたいだった。曲目はその場で相談しなかったから学級委員として決めてきてくれたのだろう。三曲か五曲だったか次々と歌声は流れた。その中で「ふるさと」は必ず歌ったから覚えている。他には誰も見当たらない所だ。ようやくたどり着いたお墓だものという感じで思いっきり大きな声だった。和美さんに聞こえてるかなあ、下の方に点在する家々までも届いているかもしれない等と思いながら……遥か遠くの山の間に海がほんのちょっとだけ光って見えて歌っている私達をそっと覗いているような気がした。歌い終わると皆で手を合わせる。それぞれ何を語りかけていたのか。私は「中学で勉強がんばってるから。桜貝は宿題をする時、ノートの横に置いてるさ」こんなことを心の内でつぶやいていた。その後、和美さんがそこに立っているみたいに「またね」「さいなら」「バイ〳〵」と思い思いに手を振り来た坂を下る人がほとんどだ。私だけさらにもう少し登り墓のある頂上まで行ってから下るのが近道になる。急坂を降りきると雑木林で陽もささないトンネルのような山道をしばらく歩く。でも一人で帰ったことはない。「遠回りになっても違う道を歩く方が楽しいから」と一緒に歩いてくれ

る友達がいた。たった一人では気の毒と思ってくれたのかも知れない。女子だけ五人位だったり一度は男子も加わった。村の道を何人もの学生服姿が通るのは珍しいことだ。向こうの畑や家の庭にいた人は私達を見て「今日は何があったんだべえ」と話していただろう。

和美さんの家は真っ直ぐなこの道から左へ下る脇道に入り百メートル近く行った所に見えている。三回の墓参りはいつも天気が良く山々が迫る緑の中を、皆と歩くのは癒やされるひとときでした。

いよいよ卒業式を迎えた日、和美さんのお母さんはお祝いに来て下さった。式典も一通り終わった時、会場に一礼して壇上に向かった。お母さんは元、小学校の先生で結婚後もお姑さんの協力もありしばらくは勤め続けたと聞いていた。高い所に立っても落ち着いた様子で貫禄があった。野良仕事の帰りに母と笑ったり話したりしている人と同じとは思えない。私達を見つめながら、ゆっくりとした口調で「ご卒業おめでとうございます。和美のことを忘れず毎年墓参りをしてくれたのを見ていました。その度に嬉しさと有り難い気持で胸がいっぱいになったものです。本当にありがとうございました。どうしても一言、お礼が言いたくて今日は出席させていただきました。これからも身体に気をつけてそれぞれの道を進んで下さい」この様な内容でした。

一緒に卒業できなかった和美さんを思い、又、同級生との別れも名残惜しく皆は涙をこらえきれない。次に校長先生の挨拶があった。「墓参りのことは先生方誰一人知りませんでした。今日初めて耳にして感動しています。何も気付かないで過ごしてしまい申し訳ないことでした。友達を大切に思う気持はとてもすばらしいことです。そのやさしさを胸に……ここを卒業してゆく皆さんを誇りに思います」先生は時に言葉をつまらせながら語りかけて下さった。

卒業式も終わり、私達はこの思い出深い中学校から巣立っていきました。

和美さんとの別れは枇杷の実る季節。
それは半世紀を越えて巡ってきては過ぎていった。長い人生の中でなんと様々な試練に出会ったことか。
又、私を力づけるかの様に大きな喜びやちょっとした喜びも訪れた。
悲しみは語れば語る程、辛くなるからさらっとながす。まったく話さないこともある。喜びは自慢気になりそうで多くは語らない。だが、けして無口な私ではない。友達と姉と周りの人といくらでも語り合える。とても幸せなことだと思う。どうせ生きるなら明かるく笑っていたい。
縁あって函南町が永住の地となり良かった。山育ちの私は緑豊かな暮らしが好きだ。この景色は故郷の思い出につながってゆく。
桜貝は度々の引っ越しで行方知れずになってしまった。しかし今でもおかっぱ頭で丸顔の和美さんと共に脳裏に浮かぶのです。そこにお墓での歌声がかすかに聞こえてくるような……。

弥生さんの過去の応募作品は以下の
二次元コードから読むことができます。

『オレンジ色のＴシャツ』

『ぼんぼ』

桜貝（さくらがい）

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　弥生（やよい）

令和８年度 函南町立図書館８月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

六年生の時、同級生の和美さんから手渡された桜貝のことはいつでも思い出せる。

突然のできごとに胸が塞がれる思いでしたが大切な物入れの小箱にしまわれ、それは、いつも私のそばにあった。創作もまじりますがほぼ実話です。